



発行：公立大学法人 大阪市立大学  
女性研究者支援室

編集：関澤彩真

デザイン：西野雄一郎

表紙写真：理学研究科新学舎（平成26年1月完成）

発行日：2014年3月

本誌に関するお問い合わせ・ご意見・ご感想は

大阪市立大学 女性研究者支援室

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

tel：06-6605-3660

e-mail：occu-support-f@ado.osaka-cuac.jp

本誌に掲載の写真および原稿の無断転用を禁じます



杉本キャンパス

商・経・法・文・理・工・生活科学 各学部・各大学院研究科・本部  
〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

阿倍野キャンパス

医学部・大学院医学研究科・大学院看護学研究科・医学部付属病院  
〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町 1-4-3

梅田サテライト

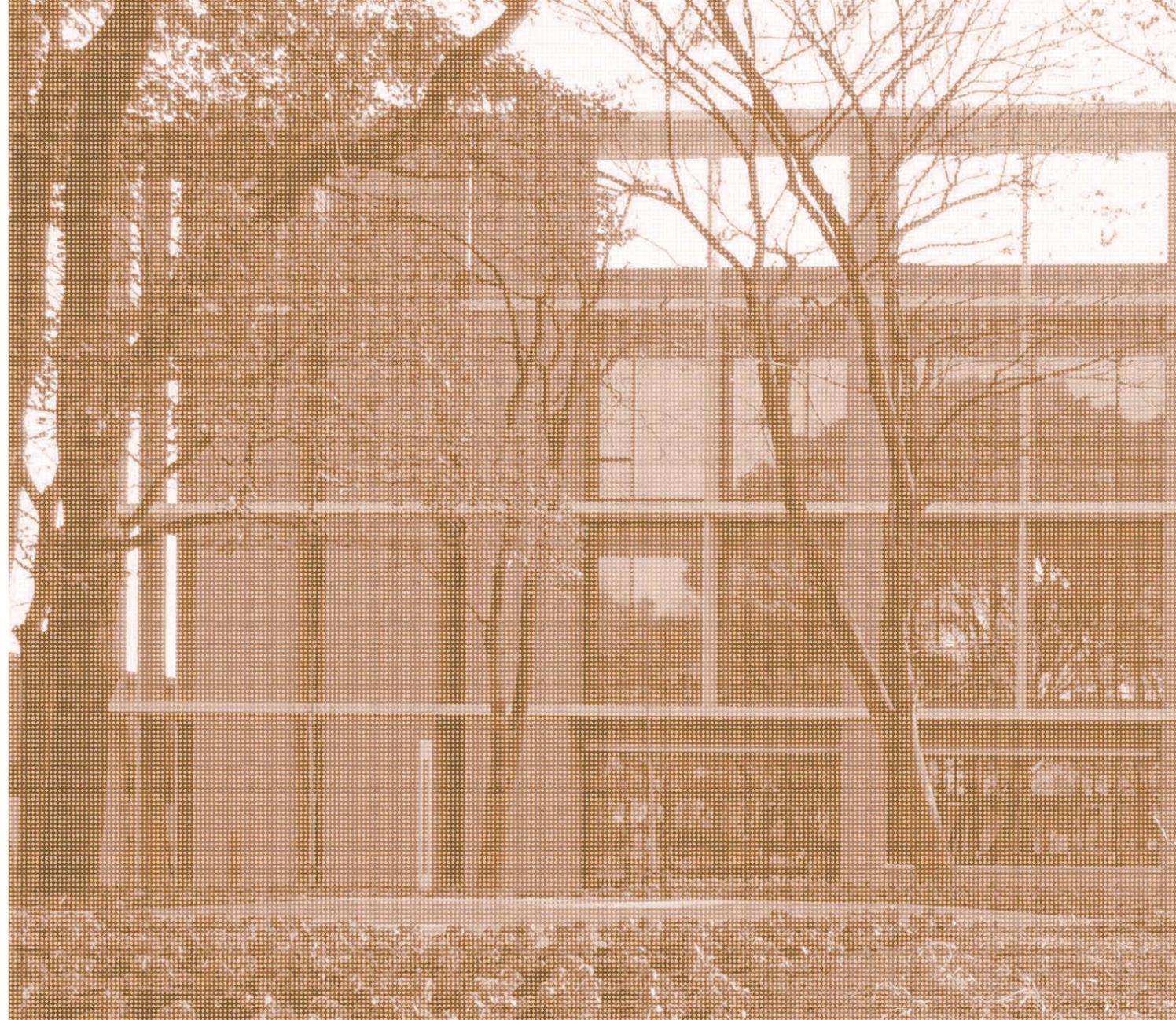
大学院創造都市研究科・文化交流センター  
〒530-0001 大阪市北区梅田 1-2-2-600 大阪駅前第2ビル6階

公立大学法人  
大阪市立大学

## 女性研究者支援室だより

2014  
vol. 1

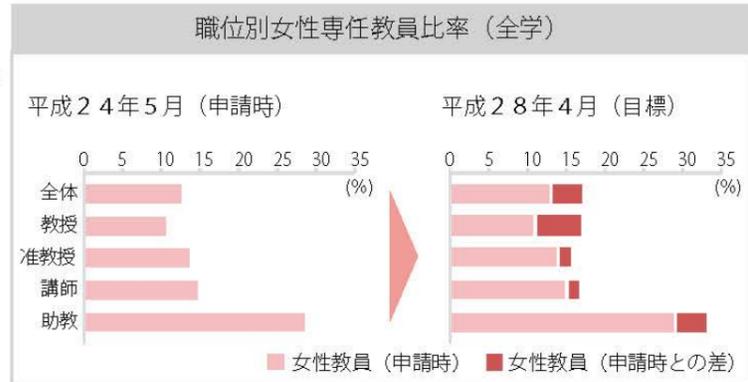
- ・女性研究者研究活動支援事業
- ・キックオフシンポジウム開催
- ・研究支援員制度の体験談
- ・女性研究者支援室





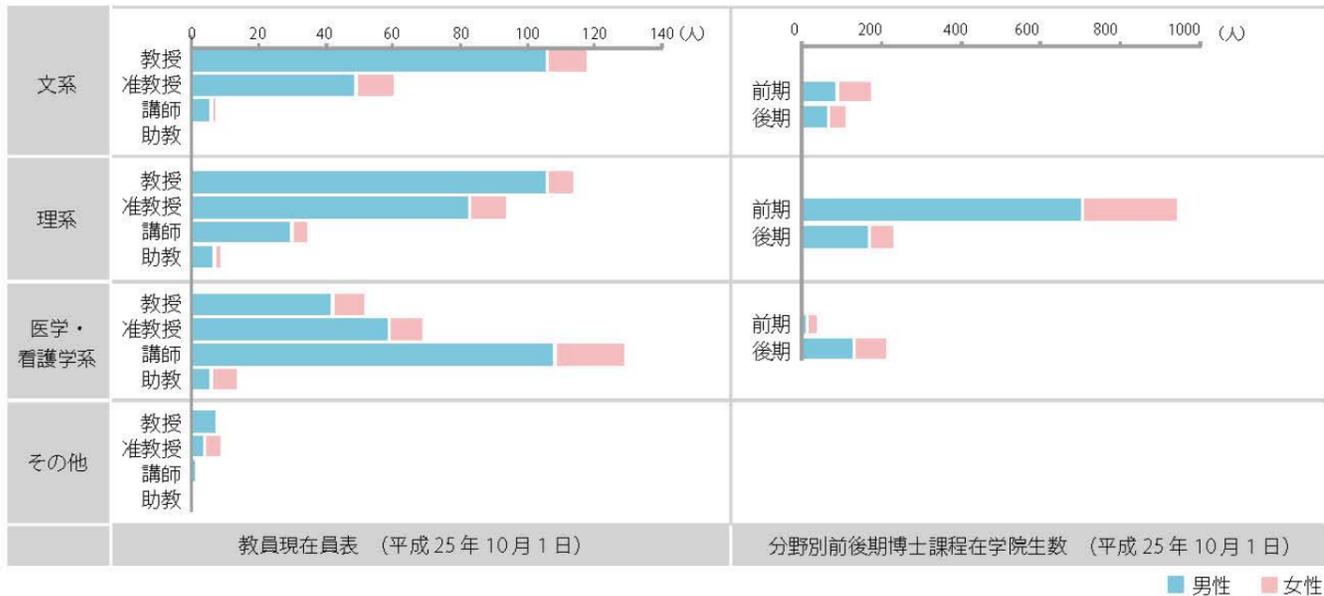
# 平成28年度達成目標

- 1 女性研究者採用比率 30%  
教授比率 12%、准教授比率 15%  
大学全体の女性研究者比率 17%
- 2 メーリングリスト登録率 100%
- 3 アンケート調査へ回答率 80% 以上  
セミナー等への女性研究者参加率 50% 以上
- 4 「くるみんマーク」の取得



## 1 現在の女性教員数、女子学生数は？

一部の部局・職位を除いて男性教員に比べ女性教員の数是非常に少ないのが現状です。女性が働きやすい環境を整備し本事業の達成目標である女性研究者採用比率アップを目指します。  
同時に、研究者を目指す大学院の女子学生にとっても勉強・研究をしやすい環境を作り、裾野拡大を目指します。



文系	経営学、経済学、法学、文学 各大学院研究科 創造都市研究科	医学看護学系	医学、看護学 各大学院研究科
理系	理学、工学、生活科学、各大学院研究科	その他	大学教育研究センター、英語教育開発センター、都市研究プラザ 都市健康・スポーツ研究センター、複合先端研究機構

データ提供：職員課

## 2 女性研究者メーリングリスト

女性研究者支援事業に関するイベントや情報などをお知らせするためのメーリングリストを作成しています。

女性研究者、若手研究者、研究者志望の学生の皆さんはぜひ登録にご協力ください。また、本事業に興味のある男性の皆様も歓迎いたします。

登録については主に女性研究者支援室主催のイベントの際に案内していますが、いつでも受付中です。詳しくは女性研究者支援室までお問い合わせください。

## 3 アンケート調査・セミナー

毎年女性研究者支援に関するアンケートを実施する予定です。また、セミナーやシンポジウムなども随時開催する予定ですので、みなさまのご協力・ご参加よろしくお願いたします。

## 4 くるみんマーク



厚生労働省が少子化対策として子育て支援に積極的に取り組む企業や団体などへの認定マークを決め、そのマークの愛称「くるみん」と呼んでいます。くるみん取得のためには、決められた期間内に主に子育て中の社員や教員の労働環境改善に関する目標を達成する必要があります。その目標の一つに「男性の育児休暇の取得」が挙げられます。

取得に向けて

## 育児中のママやパパをサポート

知っていますか？  
女性教職員だけではなく男性も育児休業を取得できます！！



女性研究者支援室では、出産や育児といったライフイベントを抱える多くの教職員の方が育児休業を取得しやすい環境づくりを目指しています。その一環として、他大学で育児休業の取得経験のある男性研究者をお招きして「育児と研究の両立」についてお話いただく交流会や、「育児休業の取得とその後の職場復帰」に関するセミナーを開催しています。育児休業取得を案内するためのブックマーク(左図)も作成しました。

出産・子育てに関するガイドブックを女性研究者支援室でも配布しております。

## 育児休業取得男性第一号！

古山陽一さん  
大阪市立大学医学部附属病院勤務 看護師

実は育児取得を希望している男性は少なくないと感じていますが、男性の育休取得に理解のある職場・環境はまだ少ないのが現状かと思えます。「男性も育児に関わることができる」という専門的な知識を得ることができれば、男性自身も育児に自信が持てますし、「男性による育児の必要性」について、男女問わず職場の同僚から理解を得ることができるのではないかと思います。

## 学内保育施設を紹介

### 杉の子保育園



杉の子保育園は、教員及び学生が教育・研究及び勉学と育児の両立にあたり、市区町村の認可保育園等では受入れが困難な場合や、緊急、一時的、断続的に保育を必要とする場合においても、安心して教育・研究及び勉学が続けられるよう支援することを主な目的としています。

利用対象：大阪市立大学の教員または学生が養育する0歳(生後57日)から小学校就学前までの乳幼児

※職員が月極保育利用をする場合は、定員に余裕がある場合に限り、原則として年間3か月の利用とします。

●阿部野キャンパスの方は  
大阪市立大学医学部附属大学病院  
院内保育所(カンナ保育所)  
病児保育(たんぼぼ)が利用できます。



●お問い合わせ  
大阪市立大学医学部附属大学病院  
院内保育所(カンナ保育所)  
TEL: 06-6645-2721  
病児保育室(たんぼぼ)  
TEL/FAX: 06-6645-3636

詳しくは本学のホームページをチェック！  
<http://www.osaka-cu.ac.jp/ja/academics/institution/nursery/index.html>

●お問い合わせ  
職員課(1号館1階) TEL:06-6605-2021  
杉の子保育園 TEL:06-6605-3610

# キックオフシンポジウム開催

## 「はじめます女性研究者支援、大阪市立大学・男女共同参画への第一歩」

若手研究者の育成を含めて、女性研究者の研究活動を支援する取り組みを本格的に開始するにあたり、全学にむけて平成 25 年 12 月 11 日にキックオフシンポジウム「はじめます女性研究者支援、大阪市立大学・男女共同参画への第一歩」を開催しました。

基調講演として、独立行政法人科学技術振興機構・科学技術システム改革事業 山村康子 プログラム主管から、本事業の意義と展開についてご講演をいただきました。特別講演では、公立大学法人大阪府立大学 人間社会学研究科 田間泰子 教授（女性研究者支援センター長）から、大阪府立大学における取り組みと本学との連携の可能性についてお話をいただきました。続いて、新室長である法学研究科 金澤真理 教授が挨拶を行い、本取り組みに関して運営委員である理学研究科 大仁田義裕 教授より説明をおこないました。最後に、パネルディスカッションが行われ、生活科学研究科 服部良子 准教授をファシリテーターとして、登壇された 3 名の講師とフロアとの間で質疑応答がなされました。数値目標の解釈や、支援と効果のジレンマについて意見が交わされました。

### 基調講演 「女性研究者支援・育成の現状と今後」



山村 康子 プログラム主管  
科学技術振興機構

今回のキックオフシンポジウムは、大阪市立大学全体として女性研究者支援・育成を推進しようという強い意気込みが感じられるものでした。教職員の皆様からのご質問もあり、今後どのように事業を展開していくべきか真摯にご検討いただいていることがよくわかりました。本事業を既に実施した大阪府立大学とも連携を組みながら、「女性研究者支援室」を中心に取組を進め、この 3 年間で女性研究者が真に活躍できるようなシステムの構築が進められることを期待しております。

### 特別講演 「女性が生き生きと輝ける社会をめざして - 大阪府立大学の取り組みから両大学連携へ -」



田間 泰子 教授  
大阪府立大学女性研究者支援センター長

なぜ、女性研究者を支援するのか？ とすれば、この支援事業は「女性」の特別扱いだと受け止められがちです。しかし、この事業の目的はただ一つ。性別や私生活のあり方などに関わらず、みんなが個々の能力を活かせる環境づくりです。働きやすく、研究しやすく、学びやすい大学をつくるのです。教職員はそのための車の両輪です。

事業期間が終わる 3 年後にはきっと、自分たちの大学が変わったと実感できます。それを楽しみに頑張ってください。

### パネルディスカッション

「男女共同参画への道  
- 女性研究者支援は大学をどう変えるのか? -」



パネルディスカッションの様子

### OG からのメッセージ



久保 由加里 准教授  
大阪国際大学短期大学部  
ライフデザイン総合学科

2012 年 創造都市研究科  
都市政策専攻 都市経済・  
地域政策研究分野 修士  
課程にて学位を取得  
(都市政策)

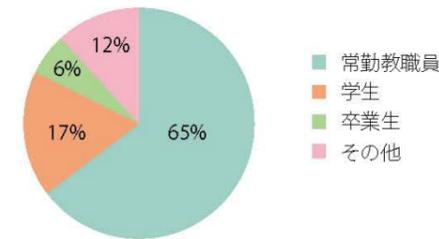
キックオフシンポジウムの開催を心よりお祝い申し上げます。私は大学の教員として、さらに研究活動を充実させるべく創造都市研究科で学びました。仕事との両立に辛酸をなめることもありましたが、そこで得た知識、ネットワークはかけがえのないものであります。現在は、学んだことを活かして、教育と研究の両面でさらなるスキルアップを図っております。

現在、女性研究者が出産、育児又は介護等のライフイベントと研究の両立できる環境づくりは急務だといえます。そしてそれは大学や企業全体としての研究の活性化に寄与するものであります。この支援室が啓蒙活動、そしてネットワークづくりを担うことを期待いたします。

大阪市立大学の女性研究者の皆様への今後の御活躍を祈念いたしますとともに、私どももご支援申し上げたいと思います。

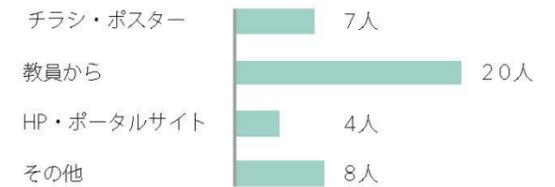
### アンケート結果

#### ・参加者の割合



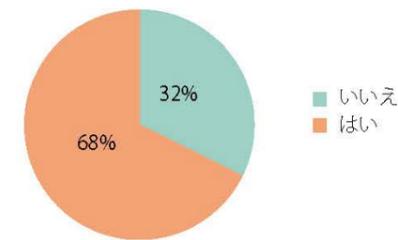
教職員と学生を中心に 107 名が参加し、うち 34 名からシンポジウムに関するアンケートにご回答いただきました。アンケート結果の一部を紹介します。

#### ・シンポジウムをどのように知りましたか？



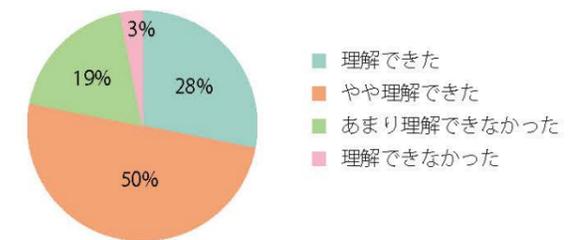
本キックオフシンポジウム開催にあたり、女性研究者支援室では HP・ポータルサイトへの案内の掲載、チラシやポスターの掲載・配布も行いましたが、周知には教員の方々のご協力が大きかったようです。

#### ・女性研究者支援室があることを知っていましたか？



シンポジウムに参加いただいた約 7 割の方は女性研究者支援室についてご存知でした。今後も学内のより多くの方に女性研究者支援室の活動についてご理解やご協力いただけるように努めたいと思います。

#### ・事業取り組みを理解できましたか？



シンポジウムに参加いただいた約 8 割の方には本事業の取組に関してご理解いただけたようですが、「やや理解できた」方の占める割合が大きいため、できるだけ多くの方に本事業に関して簡単に理解していただけるような形での啓蒙活動が今後の課題です。

#### ご感想

先進国 30 ヶ国中日本の女性研究者の割合は最下位であることを知り、両性の差異を明確にして研究者として同等であること、その真実を実現するために急ぐ必要性を感じた。

本学の文系での事業がよく見えなかった。現状からすると、致し方ない点があるが、やや理系の問題に矮小化されているような印象を受けた。

文系分野に比べ理系分野の方が女性研究者の割合が特に低いことがクローズアップされたため、本事業は「理系分野のためである」というように思われた方が多かったようです。しかし、本事業では研究分野を問わず様々な立場の女性研究者の研究環境の改善を目指しています。本事業の趣旨について誤解のないように理解していただけるような広報活動が女性研究者支援室の今後の課題です。

#### 今後の改善点に関するご意見

ライフイベント中の女性研究者に対するポストドクや RA の配置を積極的に検討いただきたい。保育園への申し込みを着任後ではなく、内定と同時に受け入れてもらいたい。また保育園を土曜日も開園してもらいたい。

介護などを視野に入れると、学内の会議の会議が長時間（夜間）に及ぶなど、非効率な運営がされている点を改善することが必要だと思う。そのような観点からの勉強会（電子媒体の活用など）があれば「システム」の改善につながると思う。※杉の子保育園の運営の課題にも取り組んでいただきたい。

育児サポートについては前頁で触れましたが、介護については過去 4 年間で本学において男女教職員計 65 人の介護休業・休暇の取得実績があります。しかし、ご指摘のような介護休業・休暇だけでは対応しきれない問題に焦点を当て、今後はその解決に取り組みたいです。



本学の女性研究者支援事業の一環の「支援員制度」は、出産、育児、介護などのライフイベントを抱え、研究時間の確保が困難な女性研究者に研究業務の一部を代替する研究支援員を派遣するものです。ライフイベントを抱える本学の常任の女性教員は、この支援員制度を利用することができます。今回はこの支援員制度がスタートして一番に利用を決めてくださった佐々木八千代准教授と支援員である堀田佐知子さんにお話を伺いました。看護学研究科の佐々木八千代准教授は高齢者の健康に関することや介護保険施設における老年看護の質の向上をテーマに研究されています。

Q. どんな業務をどれくらい支援員に代替してもらいますか？  
A. 支援業務として週に 2-3 日です。仕事内容は調査準備、データ収集、分析、資料作成、文献調査などです。

## 女性研究者支援制度に一番乗り

佐々木 八千代 准教授 (写真左)  
看護学研究科

### 女性研究者にとって力強いサポート

育児休暇から仕事に復帰して1年が過ぎました。子育てを始めるまでは、子どもを育てながら働く同僚の状況を十分に理解できず、厳しいことを言っていたように思いますが、いざ、自分がその立場になってみると、保育園のお迎えの時間があり、遅くまで残って仕事をすることが出来ません。家に持ち帰っても、まだ1歳8ヶ月の息子を前に、なかなか仕事に手が付けられません。特に研究に関しては、後期は実習期間でほとんど毎日学外の実習施設に出ており、なんとか調査をするものの、分析し、まとめる時間が取れずにいました。そして、そのことがとても気になっていました。しかし、この状況を何とかしたいと思いながら、どうすることもできずに過ごしていました。そんな時に、支援員制度を知りました。支援員制度を利用することで、今まで行っていた調査準備やデータ収集の一部、滞っていた分析作業をお手伝いいただき、研究成果をまとめる時間を少しでも確保したいと考えています。また、今回は、同じ看護系大学の教員経験のある支援員にサポートしていただくので、とても心強く思っています。まだ利用し始めたばかりですが、この制度が継続していくことは、子育て中の女性研究者にとって力強いサポートになると思います。

堀田 佐知子 さん (写真右)  
支援員

### 支援員としての意気込み

これまでの看護系大学の教員経験から、子育てをしながら教育・研究をしていくのは、とても大変なことを目の当たりにしてきました。特に、看護教育は実習が長期に渡り、ほとんどが臨地での指導であるため、子育てをしながら十分な研究時間を確保するのは難しいと思います。研究支援員制度は、子育て中の女性研究者にとって有意義な制度だと考えます。私自身にとっても、これまでの研究経験を生かすことが出来ると同時に、同じ女性として子育て中の女性研究者をサポートできるため、やりがいがあります。佐々木先生をしっかりサポートしていきたいと思っています。

**大阪市立大学**  
女性研究者 研究活動支援員制度  
支援員を活用してませんか？  
支援員としてスキルを活用してませんか？  
ライフイベント(出産、育児、介護)を抱えている研究者の悩みの研究時間を確保する方へ、研究活動を支援します！  
女性研究者の悩みに応じて、女性研究者も活用する男性研究者も対象です。  
女性研究者支援室  
Mail: odu-support@obu.ac.jp Tel: 06-6605-3660

女性研究者をパートナーに持つ男性研究者も支援対象です。  
出産・育児・介護で時間のない研究者



育児は女性だけのイベントではなく、もちろん男性研究者でも育児と研究を両立させて行っています。今回はそんな育メン研究者の育児と研究の現場の声をお届けします。

2014年2月8日 銀杯会 (OB・OGを交えてのゼミ会合) にて

## 育メン研究者の研究と子育ての現場

長尾 謙吉 教授 (写真前列中央)  
経済学研究科

女性研究者支援室の運営委員長(宮野道雄副学長)以外では初めての男性運営委員ということもあり、本欄を執筆することになりました。とはいえ、期末試験、卒業論文発表会、ゼミ OBOG 会、国際ラウンドテーブルが迫る中で依頼が届き、次女の怪我、長女と妻のインフルエンザと受難が続いています。まさに「泣き面に蜂」状態で編集担当にご迷惑をおかけしています。このように、子育て中は計画通りに物事が進まないことが多々あります。本学の女性研究者支援室は、「女性研究者が教育、研究に専念し、その能力を発揮し、かつ、次世代の担い手を育成することができる環境の整備に努めるため」に開設されました。しかし、現実に子育て中の身からすると、「専念」することが目指すべき方向なのか疑問を持っています。このことを、2012年3月に開催された「女性研究者支援室開設記念講演会」でも質問を投げかけました。長い研究者生活を100%専念し続けることのできる人は、どれくらいいるのでしょうか？「専念」という観点こそ、日本の大学において女性研究者のキャリア形成の道を狭めてきたのではないのでしょうか？私は経済地理学を専門としており、「机上の勉強とともに現場での調査や対話」が必要なテーマを研究しています。独身で、かつ日本学術振興会特別研究員や本学経済研究所の教員であった時は、時期や時間を問わず大阪の街なかや海外へ出かけ、口の悪い大学院生からは「バカンス教員」などと揶揄されたこともありました。その後、子育てだけが理由ではありませんが、思うように調査や会議のための日程を組まず、また研究成果をあまり出すことができない時期もありました。学界関係者からは「用事がない時は出てこない」、産学官連携の関係者からは「長尾先生は死んだのか？」などとも言われました。学内の「杉の子保育園」には研究教育のリズムを取り戻すうえで、大いに助けられました。しかし、北米に比べると、日本での研究者生活は夜や週末にかかることが多く、私にとって悩みのタネです。女性研究者にとっても、そうした「悩みのタネ」がたくさんあることでしょうか。大学や学界の年長者から煙たがられながらも、次世代のための「声」は上げていきたいと思っています。



澤田 彩 さん 経営学研究科・後期博士課程1年

現在経営学研究科後期博士課程1年生として太陽光発電産業の産業分析を行っています。同時に現在2歳の長男を子育て中のママでもあります。研究と子供両方と丁寧に向き合い、将来的には共に高め合い成長していくような対等な親子関係を築いていきたいと考えています。とはいっても実際の育児はきれい事では片付けられないことばかりで、心が折れそうになることも多いです。子育てに代表されるライフイベントによって発生する研究時間の制約や託児問題、経済的問題を少しでも軽減できれば、自分の夢を追求できるチャンスをもっと増やすことが出来ると思いますので、女性研究者支援事業の拡大・発展に期待しています。



今田 一姫 さん 理学研究科・後期博士課程3年  
日本学術振興会特別研究員 DC1

モデル生物である酵母菌を用いて、その胞子が形成され始めるメカニズムに興味を持って研究しています。研究は、期待から落胆や喜びや驚きが得られる、基本的には(!?)非常に楽しいものです。これまでの研究生活が生かせる仕事に就きたいですが、やはり学生期間が終わった後が不安です。その要因の一つには、キャリアと女性ならではのプライベートのトレードオフがあると思います。その配分が選べるよう、中庸なポストや両立の支援が充実することを期待します。



彭 雪 さん 博士(工学)  
研究支援課 博士研究員

本学工学研究科を平成25年9月に修了。現在就職活動をしなが、自分の研究(厚板鋼板を用いた多列高力ボルト摩擦接合継手のすべり挙動に関する研究)も続けています。自分自身の経験からも女性研究者の就職や育児などは大変だと感じているため、後期博士課程の女子学生や女性ポスドクへの支援は必要だと考えています。そして、夢を持つ若手研究者を支援できる制度があればいいと思っています。

### 先輩からのメッセージ

内藤 由佳子 准教授 甲南女子大学 人間科学部  
2005年 文学研究科 教育学専修 後期博士課程にて学位(文学)を取得

ドイツ新教育運動期の初等教育段階における教師と子どもの関係性について実践記録をもとに考察を行っており、現在は、日本、ドイツの幼小連携カリキュラムについても研究を進めています。

1年間の育休を経て、職場復帰をして6年になります。私の場合、教育方法学という子どもと関わり深い分野を専門としていたこともあり、育児は研究面においても貴重な経験となりました。自分のための時間は格段に減り、焦りを感じることもありましたが、キャリアを長期的な視点から捉え直し、状況に応じて優先順位を柔軟に変えることで乗り越えてきたように思います。研究の継続には職場の支援が不可欠です。

大阪市立大学の女性研究者支援の取り組みに期待しています。

運営委員

宮野 道雄  
運営委員長  
研究担当副学長

少子高齢化が進展し、労働人口が減少を続けるわが国においては、社会的にダイバーシティ・マネジメントが求められています。ここでは、男女共同参画のみならず定年延長にみられるような多様な年齢層の登用など幅広い人材確保の視点が必要になってきます。一方、大学においても国が女性研究者の採用目標を30%まで引き上げる目標を立てている中で、教員のライフイベントに応じた支援体制を整えることにより、女性研究者が働きやすい教育・研究環境を整えようとしています。本学でも女性研究者支援室を中心とした活動によって、女性研究者比率を高めるだけでなく、すべての教員・若手研究者が働きやすい環境を整備すべく、取り組みを進めています。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

金澤 真理  
女性研究室長  
法学研究科 教授

大阪市立大学は、平成24年11月、女性研究者が研究、教育にその最大限の能力を発揮し、次世代の担い手を育成することができる環境を整備するために女性研究者支援室を設置しました。女性研究者の支援を名称に掲げていますが、ワークライフバランス(仕事と生活との調和)を実現し、研究に従事しやすい環境を整えることは、女性のみならず、すべての研究者にとって重要な課題であると考えられます。女性研究者支援室は、男女共同参画の実践において先行する他大学、他機関に倣い、また、平成25年度科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業(一般型)」に選定されたことを契機として、領域を超えたネットワークを形成しながら、大学全体として研究活動を活性化することを目標に、諸施策に取り組んでまいりますので、どうかよろしくご期待いたします。

石井 真一  
経営学研究科 教授

長尾 謙吉  
経済学研究科 教授

奥野 久美子  
文学研究科 准教授

大仁田 義裕  
理学研究科 教授

鍋島 美奈子  
工学研究科 准教授

新宅 治夫  
医学研究科 教授

佐々木 八千代  
看護学研究科 准教授

服部 良子  
生活科学研究科 准教授

村上 晴美  
創造都市研究科 教授



女性研究者支援室スタッフ

木下 裕美子  
チーフコーディネーター

フランスやカナダ・ケベック州をフィールドとして家族に関する研究を行っています。今はまだ各部署の皆様へ支えられながら運営を行っている支援(されている)室ですが、本学のニーズに対応した支援事業の確立を目標としております。皆様、お気軽に支援室まで声をお寄せ下さい。そうした声が本学の研究環境を一層快適なものにすると思います。皆様とともに本支援室の取り組みに尽力致しますので、宜しくお願い致します。

太田 麻希子  
コーディネーター  
博士(社会科学)

フィリピン・マニラの貧困地区をフィールドに、女性の労働や移動、住民組織活動に焦点を当て研究を行なって参りました。大阪市立大学に来てからというもの、「女性研究者支援」を共通項に異分野の研究者・職員の方々との接点が増え、新鮮な驚きと勉強の日々を重ねています。微力ではありますが、私自身が女性ポスドクとして培った経験をもとに、専攻の境界を越えたネットワーク形成や、より良い研究環境づくりに貢献したいと思っています。

関澤 彩眞  
コーディネーター  
博士(理学)

本学理学研究科を平成25年6月に修了し、現在同研究科の無給研究員として同時雌雄同体動物ウミウシの繁殖行動の研究を行っています。自身も若手系研究者として特に後期博士課程の女子学生や常勤ポストに就く前の女性ポスドクへの支援の必要性を感じています。支援対象である「女性研究者目線」で本学の女性研究者支援活動に貢献できればと思っています。

三好 徳子  
事務員

澤田 彩  
学生スタッフ  
経営学研究科後期博士課程

高木 修一  
学生スタッフ  
経営学研究科後期博士課程

西野 雄一郎  
学生スタッフ  
工学研究科後期博士課程

浅野 正貴  
学生スタッフ  
理学研究科前期博士課程

中田 智大  
学生スタッフ  
商学部